

香川県指定史跡椀貸塚、角塚及び平塚古墳
保存・活用検討委員会報告書

2009.3

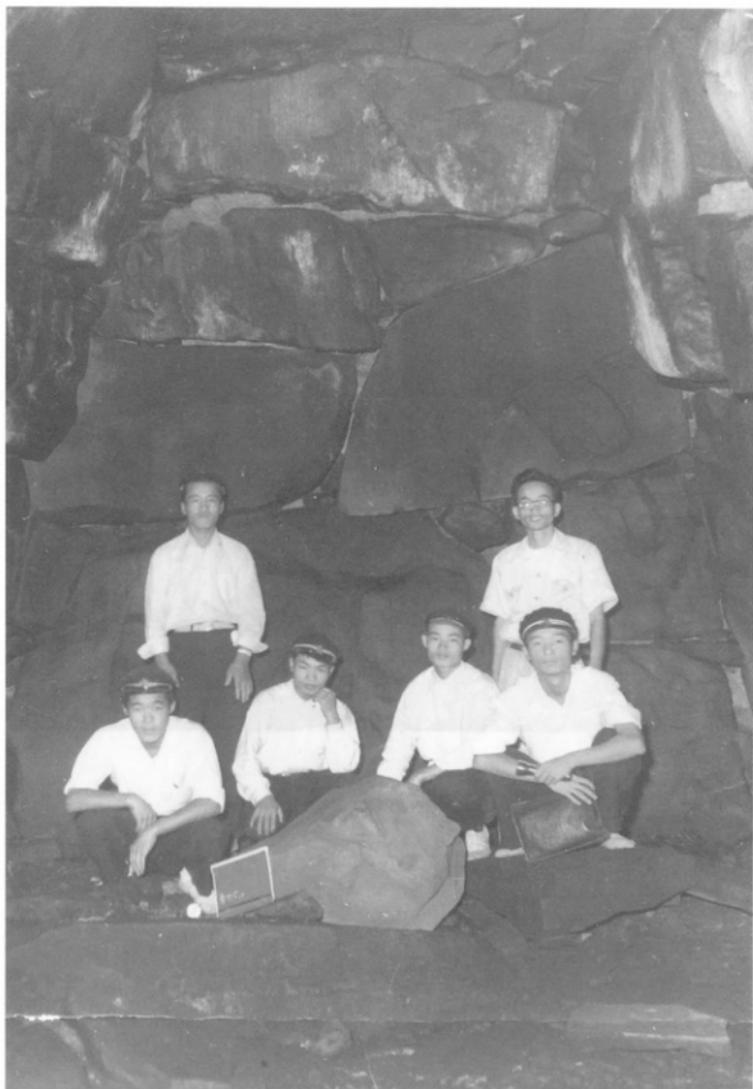


大野原八幡神社と椀貸塚【大野原開墾古図（正保2年）より】

観音寺市教育委員会



大野原古墳群 (航空写真)



腕貸塚古墳石室内部写真（昭和28年10月4日撮影）

例 言

1. 本書は、平成18年12月から平成21年3月までに開催された香川県指定史跡椀貸塚、角塚及び平塚古墳保存・活用検討委員会の検討結果と観音寺市教育委員会が埋蔵文化財保存整備事業として実施した調査内容の報告書である。
2. 本報告書では、香川県指定史跡椀貸塚、角塚及び平塚古墳を対象とした。
3. 本書の執筆・編集及び椀貸塚、角塚及び平塚古墳の石室実測・墳丘測量は、観音寺市教育委員会事務局 生涯学習課 文化振興係 主査 久保田昇三が担当した。
4. 挿図の一部に、「観音寺市都市計画図2（1/10,000）」、「観音寺市都市計画図17・18（1/2,500）」を使用した。墳丘測量図は1/400、石室実測図は1/80及び1/40とした。図面の方位はすべて磁針方位で示した。また、実測図の縮尺はすべてスケールで表示した。
5. 図面・写真等は観音寺市教育委員会事務局生涯学習課で保管している。
6. 本事業の実施にあたっては、大野原八幡神社 宮司 柘植宗尚氏をはじめ神社関係の皆様にご理解ご協力を頂いた。また、墳丘測量調査に携わった観音寺市シルバー人材センターの牧野巧氏、荻田公一郎氏、松岡豊史氏、森川健一郎氏、尾池辰生氏、田淵竹良氏にご協力を頂いた。記して謝意を表する。
7. 本書の執筆にあたっては、高瀬要一氏、丹羽佑一氏、大久保徹也氏、菱田哲郎氏、守谷貞和氏、横山照美氏、新納泉氏、高橋照彦氏、清家章氏、吉田広氏、森格也氏、片桐孝浩氏、北山健一郎氏、森下英治氏、信里芳紀氏、乗松真也氏、中勇樹氏、大田匠園 太田文雄氏の助言・協力を得たので記して謝意を表する。（順不同）

目 次

巻頭グラビア・例言・目次

1. 大野原古墳群の立地環境と歴史的経緯	1
2. 香川県指定史跡椀貸塚、角塚及び平塚古墳保存・活用検討委員会	5
(1) 検討委員会設置の経緯	
(2) 検討委員会の構成	
(3) 検討委員会の開催記録	
(4) 香川県指定史跡椀貸塚、角塚及び平塚古墳保存・活用検討委員会設置要綱	
3. 調査結果の概要	9
(1) 椀貸塚	
(2) 平塚	
(3) 角塚	
(4) 基礎調査のまとめ	
<div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin: 10px 0;"><p>【香川県指定史跡椀貸塚、角塚及び平塚古墳保存・活用検討委員会からの報告書】</p><p>～ 大野原古墳群の保存と活用のために ～</p><p>Ⅰ 大野原古墳群の文化財的価値</p><p>Ⅱ 大野原古墳群の現状と課題</p><p>Ⅲ 大野原古墳群の保存・活用を図るための課題と方策</p><p>Ⅳ 総括</p></div>	
4. 参考資料Ⅰ(文献等)	27
5. 参考資料Ⅱ(写真)	33
6. 報告書抄録	38

1. 大野原古墳群の立地環境と歴史的経緯

大野原古墳群が立地する地域は香川県観音寺市大野原町大野原であり、讃岐山脈を源とする梓田川が形成した扇状地のほぼ中央部の標高30m前後に位置する。現在の瀬戸内海燦灘の海岸線までは西方向へ約2.5km、扇状地がはじまる讃岐山脈の山麓部までも同じく約2.5kmの距離がある。また、平成17年10月11日の市町合併により観音寺市となるまでは三豊郡大野原町の町域であり、近くには大野原町役場（現大野原支所）がおかれるなど、農村部であるが比較的人口が集中する町の中心部において古墳群は存在感のある歴史的景観を形成している。

古墳群のうち椀袋塚は大野原八幡神社の本殿の背後にある。その名のとおり椀袋伝説が伝えられ神社の祭神とともに人々の信仰を集めている。

平塚は椀袋塚から南西方向約550mのところにあり大野原八幡神社の秋の例大祭のお旅所となっている。秋祭り3日目、神社を出発した3基の神輿は神幸行列をして平塚まで移動し、墳頂部に設けられた石垣の上に据えられ神事が執り行われる。さらに神事の後は墳頂1台と太鼓台（ちょうさ）1台が神輿前まで墳丘を登り（おやまのぼり）奉納を行い祭りが最高潮を迎える神聖な舞台となっている。

角塚は椀袋塚から南西方向約370mのところで、椀袋塚と平塚との間にある。角塚の東側と西側の一部には墓地が形成されており、椀袋塚、平塚とは異なった役割を担っている。古墳の北側は道路、西・南側については公園となっており、3基の古墳の中で最も墳丘地形が改変されている。

また、上記の3基の古墳以外にも椀袋塚の近くには岩倉塚、角塚の近くには四角塚、少し離れたところには観音堂古墳の3基の古墳が現在も良好な状態ではないが残されている。以上、計6基の古墳が比較的狭い地域に残されているが、江戸初期（寛永年間）の平田家による大野原開墾が始まったころには、地名が示すとおり、いわゆる大野原であり、まだまだ相当数の古墳が存在していたようである。例えば、安政5（1858）年に編纂された『西讃府志』の大野原村の記述には「塚穴十一 此地開キシ時百七十アリシトイヘリ、今其名アルハ、椀袋、平塚、角塚、豆塚ナドイヘルアリ、・・・」とあり、正確な数字は定かではないが、その数の多さを物語っている。角塚の築造後、やがて古墳時代は終焉を迎える。そしてこの7世紀後半から、前述の平田家の開墾が始まるまでは、約1,000年の時間を要することになる。この間の大野原地域の様子を窺える資料は乏しい。

開墾後の資料については、開墾が始まって間もない正保2年（1645）の『大野原開墾古図』がある。古図の中心部には大野原八幡神社とその背後に椀袋塚と思われるものが描かれている。こんもりとした墳丘とそれを取り巻くような周溝らしきものが見て取れる。これが、紙資料で確認できる椀袋塚の初見であると思われる。【後段の参考資料1に掲載】しかし、平塚、角塚については表現されておらず、その付近一帯を「芝」という文字が書かれているのみである。

40年後の貞享2年（1685）の『御宮相續ニ付万事覚帳』に神社の修理を行った時の記録が残されている。その中の「地形之覚」には神社を拡張した記載があり、「・〆拾三間四尺 但塚穴の口きわより玉垣のきわまで 今までは塚穴石垣きわより玉垣まで拾貳間貳尺」、「一 塚穴ニ戸仕ル筈・・」、「一 塚穴之左者廣ケ石垣も仕筈」、「一 右両方之堀り埋土者塚之雨蔭又者馬場の雨蔭小塚ノ土取申筈」など神社にある塚穴＝椀袋塚の当時の状態を若干ではあるが窺うことができる資料である。また、元禄6年（1693）にも神社の大修理が行われているようで椀袋塚にも何らかの改変がなされている可能性がある。【後段の参考資料1に掲載】

明治時代の資料には、明治35年（1902）の『香川県讃岐國三豊郡大野原村 鎮座 郷社八幡神社之景』があり、神社の建物、玉垣、石垣等の配置が詳細に描かれている。概ね

現況と異なる印象を受けないが、一部椀貸塚の開口部の付近は、土塀が設けられ、石垣のほば中央部には縦長の巨石が存在している点は現在とは様子を異にしている。なお、図中には「椀貸塚ノ縁由」として「相傳ノ昔塚穴ニ地主神在リテ太子殿ト云フ神靈著シキヲ以テ惶テ穴ニ人ルモノナシ・・」の記述がある。【後段の参考資料Ⅰに掲載】

ここまででは、椀貸塚に関する資料を紹介してきたが、平塚、角塚についてはどうであろうか。時代は前後するが明治6年（1873）頃に作成された『名東縣下第廿四大區四小區讚岐國豊田郡大野原村地圖面五拾五冊之内 拾 從千三百九十六番至千五百八十六番』には平塚、角塚の旧状を示す図が残されている。平塚については、墳丘は勿論、周溝を含めた墓域を示すであろう土地図画が明瞭に記載されており、古墳の原形を考察するための格好の資料である。金毘羅道から平塚にいたる道は墳丘と同様に緑色に着色され祭礼の際、神輿が通る通路が整備されお旅所の存在を窺わせる。角塚については、この頃古墳の東側には埋葬場が形成されていることが解かる。墳形については明瞭ではない。なお、近くを通る道は角塚道と表記されており、少なくとも角塚という名称はすでに一般的に使用されていたことが推し量ることができる。【後段の参考資料Ⅰに掲載】

なお、平塚古墳については大野原八幡神社のお旅所として使用されており、大正10年に刊行された『三豊郡史』（昭和48年復刻）掲載写真にはすでに神輿が据え置かれる石垣の存在が写されている。このことは神事を執り行うお旅所の機能を果たすため、一定の平坦な空間を確保する必要があり墳丘の頂上部を削平したことを示している。地元の古老からの聞き取りであり時代は特定できないが、外部から石材等を持ち込み平塚の石室天井部の補修をしているようである。これは石室天井高と削平した墳頂部高の差があまりなく、このころからすでに石室内に雨水等が浸入し石室の保存に影響を与えていたことを窺わせる話である。

以上、大野原古墳群に関するおもな資料を紹介してきたが、最後に、その他の関連の資料を紹介しておく。

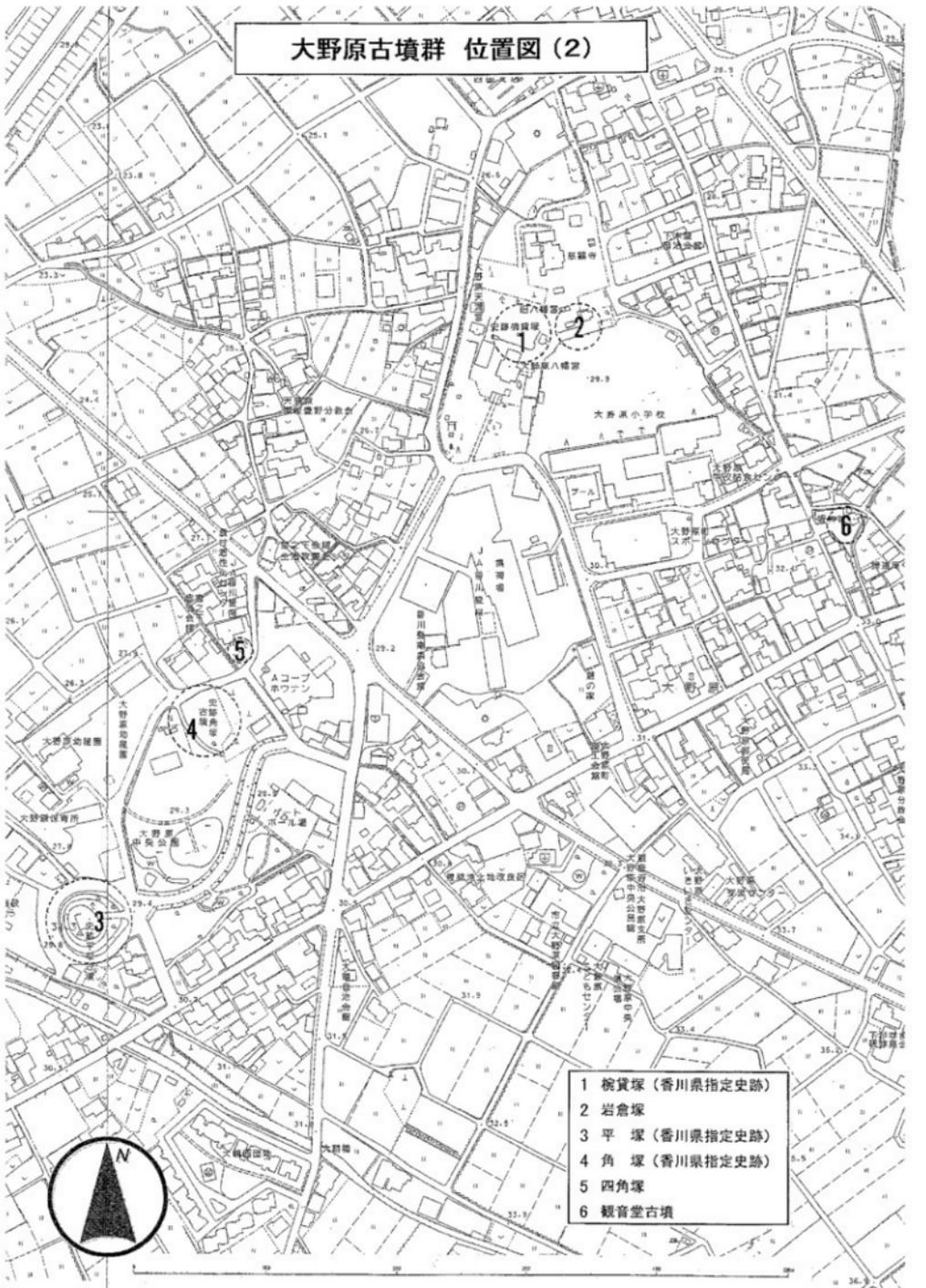
『復刻讚岐叢書（第一）国譯 全讃史』昭和47年8月1日発行 発行所 藤田書店

「椀箱家 大野原八幡の後にあり 岩家の側に穴あり。・・・此の穴龍宮城に至る。昔は八幡祭禮の時、此の穴より膳椀を出だして借りき。ある時過ちて其の膳椀を損じければ、以来又借さずと云へり。」

『古今 讚岐名勝圖繪』昭和5年10月20日発行 発行所 鶴高松製版印刷所

「八幡社 大野原八幡宮の社後椀貸穴の上であり一説に或内なる於社なりと云いかゝ走手侍。」「塚穴十一と其塚説 相傳此地開拓の時百七十餘ある中今中の残るは椀貸平塚角塚豆塚。傳曰椀塚は地主神を太子殿と稱へ穴へ入者なし村人椀を得んことを乞へば倍せり一時中庭人此塚上に在す應神祠に用あり食飯箸悉皆借て事足せり後に村人借て一箸を失せり夫より止と云當時開墾の時此穴に入る人あり神人告て曰く八幡を祭れと依て此穴を奥の院と云。」

大野原古墳群 位置図 (2)



- 1 梶賀塚 (香川県指定史跡)
- 2 岩倉塚
- 3 平塚 (香川県指定史跡)
- 4 角塚 (香川県指定史跡)
- 5 四角塚
- 6 観音堂古墳



2. 香川県指定史跡椀塚塚、角塚及び平塚古墳保存・活用検討委員会

(1) 検討委員会設置の経緯

椀塚塚と平塚は、平成9年度において、その横穴式石室の保存が危惧され当時の旧大野原町により石室内に支保工が設置された経緯がある。その後、8年の時間が経過したが、その間、保存のための具体的な対策がとられないままの状態であった。また、古墳に関する資料は外部研究者が作成した簡易な略測図程度しかなく、旧来からの重要な遺跡であるという高い評価にもかかわらず遺跡の保護を図る上では資料的にも不備な状況であった。平成17年度の中町合併以後、市内でも重要な遺跡である本古墳群の保存状態を点検したところ、支保工の木材部分は腐食が激しく、ある部分は落下し、ある部分は折れて垂れ下がるなどの状態であり、もはや支保工としての用をなしておらず、内部観察をする際などにはむしろ支保工自体が危険な存在になっている状況を確認した。この状態では保存は言うまでもなく活用・公開等にいたっては到底望まれず、将来の見通しが立たない深刻な状況であったため、平成18年度に保存・活用検討委員会を立ち上げ、古墳の基礎的なデータを取得するため石室実測や墳丘測量及び関連の文献等の調査を実施し、それら調査結果に基づき検討委員会で議論し、長期的な視野に立ち、専門的な見地から保存・活用策を検討することとなった。

(2) 検討委員会の構成

検討委員会は7名の委員で構成されている。その内訳は4名の文化財・考古学関係の専門家と観音寺市文化財保護審議会会長1名、市文化財保護協会会長1名、所有者及び地元代表1名である。以下に委員名簿を記載する。(敬称略)

会 長	守谷 貞和	観音寺市文化財保護審議会会長
副会長	丹羽 佑一	香川大学経済学部教授(考古学)
委 員	高瀬 要一	独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所文化遺産部長(遺跡整備)(平成20年3月現在)
委 員	大久保徹也	徳島文理大学文学部文化財学科教授(考古学)
委 員	菱田 哲郎	京都府立大学文学部歴史学科准教授(考古学)
委 員	横山 照美	観音寺市文化財保護協会会長(平成20年3月現在)
委 員	柘植 宗尚	大野原八幡神社宮司(所有者及び地元代表)

(※任期 平成18年12月25日～平成21年3月31日)

(3) 検討委員会の開催記録

検討委員会は平成18年12月から平成21年3月までの間に計5回開催した。第1回では検討委員会の趣旨説明と会長(守谷貞和氏)と副会長(丹羽佑一氏)を互選した。第2回では椀塚古墳の調査結果の検討、第3回では平塚古墳の調査結果の検討、第4回では文化庁の福原田調査官を招聘して指導を頂くとともに角塚古墳の調査結果の検討を行った。第5回では検討委員会としてのこれまでの検討結果報告書の内容のとりまとめを行った。参加された各委員からは熱心な意見が活発に交わされ毎回充実した検討委員会を開催することができ大野原古墳群の保存と活用に有意義な意見を取りまとめることができた。以下に各回の概要を記すことにする。

・第1回検討委員会

日時 平成18年12月25日(月)13:00～16:30
場所 観音寺市大野原中央公民館研修室
参加者 委員7名 香川県教育委員会事務局文化財担当職員(オブザーバー)1名
教育長 教育部長 生涯学習課長 文化振興係担当職員1名 計12名
議題等 ①検討委員会の趣旨説明、会長の互選
②椀貸塚、角塚、平塚の現状説明
③検討委員会の計画(案)について
④現地確認(椀貸塚、角塚、平塚)
⑤意見交換、次回への課題について

・第2回検討委員会

日時 平成19年8月27日(月)13:00～16:30
場所 観音寺市大野原中央公民館研修室
参加者 委員7名 香川県教育委員会事務局文化財担当職員(オブザーバー)1名
生涯学習課長 文化振興係担当職員1名 計10名
議題等 ①椀貸塚古墳の調査結果について
②現地確認(椀貸塚、平塚)
③椀貸塚の保存・活用について
④今後の予定について

・第3回検討委員会

日時 平成20年3月26日(月)13:00～16:45
場所 観音寺市大野原中央公民館研修室
参加者 委員5名 香川県教育委員会事務局文化財担当職員(オブザーバー)1名
教育長 教育部長 生涯学習課長 文化振興係担当職員1名 計10名
議題等 ①平塚古墳の調査結果について
②今後の検討委員会の計画について
③現地確認(椀貸塚、平塚、角塚)
④今後の課題について

・第4回検討委員会

日時 平成20年10月7日(火)13:30～17:00
場所 観音寺市大野原図書館研修室
参加者 委員7名
文化庁文化財部記念物課文化財調査官1名
香川県教育委員会事務局文化財担当職員(オブザーバー)1名
教育長 教育部長 生涯学習課長 文化振興係担当職員1名 計13名
議題等 ①角塚古墳の調査結果について
②現地確認(椀貸塚、岩倉塚、平塚、角塚)
③今後の課題について
④今後の検討委員会の計画について

・第5回検討委員会

日時 平成21年3月2日(月)13:00～16:30
場所 観音寺市大野原中央公民館研修室

- 参加者 委員6名 香川県教育委員会事務局文化財担当職員（オブザーバー）1名
教育長 文化振興係担当職員1名 計 9名
議題等 ①検討委員会の報告書（案）について
②今後の調査計画について
③検討委員会について
④現地確認（岩倉塚）



第1回検討委員会の会議風景

(4) 香川県指定史跡椀貸塚、角塚及び平塚古墳保存・活用検討委員会設置要綱

平成 18 年 10 月 24 日

教育委員会告示第 3 号

(設置)

第 1 条 香川県指定史跡の椀貸塚、角塚及び平塚古墳の保存・活用に関する方策等について検討するため、香川県指定史跡椀貸塚、角塚及び平塚古墳保存・活用検討委員会（以下「検討委員会」という。）を設置する。

(所掌事務)

第 2 条 検討委員会は、観音寺市教育委員会（以下「教育委員会」という。）の求めに応じて椀貸塚、角塚及び平塚古墳の保存・活用に関する必要な事項について検討する。

(構成)

第 3 条 検討委員会は、若干名の委員をもって構成し、教育委員会が委嘱する。

(任期)

第 4 条 委員の任期は、平成 21 年 3 月 31 日までとする。

2 補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(会長等)

第 5 条 検討委員会に会長及び副会長各 1 人を置く。

2 会長及び副会長は、委員の互選によりこれを定める。

3 会長は、検討委員会の会務を総理し、検討委員会を代表する。

4 副会長は、会長を補佐し、会長に事故があるとき、又は欠けたときは、その職務を代理する。

(会議)

第 6 条 検討委員会の会議は、会長が招集する。

2 検討委員会は、委員の過半数が出席しなければ、議事を開き、議決をすることができない。

3 検討委員会の議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、会長の決するところによる。

(庶務)

第 7 条 検討委員会の庶務は、教育部生涯学習課において処理する。

(委任)

第 8 条 この要綱に定めるもののほか、必要な事項は、教育委員会が別に定める。

附 則

1 この要綱は、平成 18 年 11 月 1 日から施行する。

2 この要綱による最初の検討委員会の会議は、第 6 条第 1 項の規定にかかわらず、教育委員会が招集する。

3. 調査結果の概要

(1) 椀塚(調査期間:平成19(2007)年2月19日~平成19年8月31日)

石室実測の結果、複室構造とされている横穴式石室は後世の改変を受けていないと考えられる範囲の石室全長が12.1mある。石室開口部には石室内側に突出する前室入口の袖石があり、この部分の長さが0.72mある。次に現在前室とされている部分が3.49mあり、その奥側には第2番目の袖石(玄門立柱)部分が1.09mある。最後に玄室長(後室)が6.8mを測る。なお、石室開口部の墳丘が切り取られている部分に羨道の存在が考えられることから、築造当初はもう少し長い石室長であった可能性が高い。

石室幅は、前室の袖石部分で1.11m、前室最大幅2.5m、玄門部分で1.28m、玄室最大幅は3.64mを測る。

石室高は前室で2.15m、玄室で3.86mあるが、この計測値はいずれも現況であり、石室内への上砂の流入が開口部で1m以上あるものと推測されことから、実際の数値は床面検出の機会を待たなくてはならない。

平面形は、前室入口の袖石と玄門立柱石が石室内側に突出する構造で、玄室部分はその石室幅が奥壁で3.45m、中央部で3.58m、玄門側で3.12mとなっており、いわゆる胴張り状の平面形を呈する。

側壁は、持ち送り構造で概ね5段階の構築過程が観察できる。特に石材間の目地には粘土状の詰め上が石室各所で確認でき、石室構築当初の姿を比較的良好に残していると思われる。

石室に使用されている石材は砂岩である。天井石は前室で3石、玄室で4石ある。どちらの天井石もほぼ水平に架構されているが、玄門の欄石上部の玄室の1石は奥壁側に高く斜めに架構されている。また、前室と玄室の天井高を比較すると玄室側が1.2m以上高く構築されていることも本石室の特徴の一つである。

また、石室床面の奥壁から1.9mのところには石室主軸に直交して長さ約2m超の石材が以前から確認されていた。これが棺台の一部ではないかと考えられてきた石材である。しかし、今回の調査に付随して昭和28年の石室内の写真を確認することができ、それによくと少し疑問な点があるのではないと思われる。今後この石材の示す意味については課題を残している。

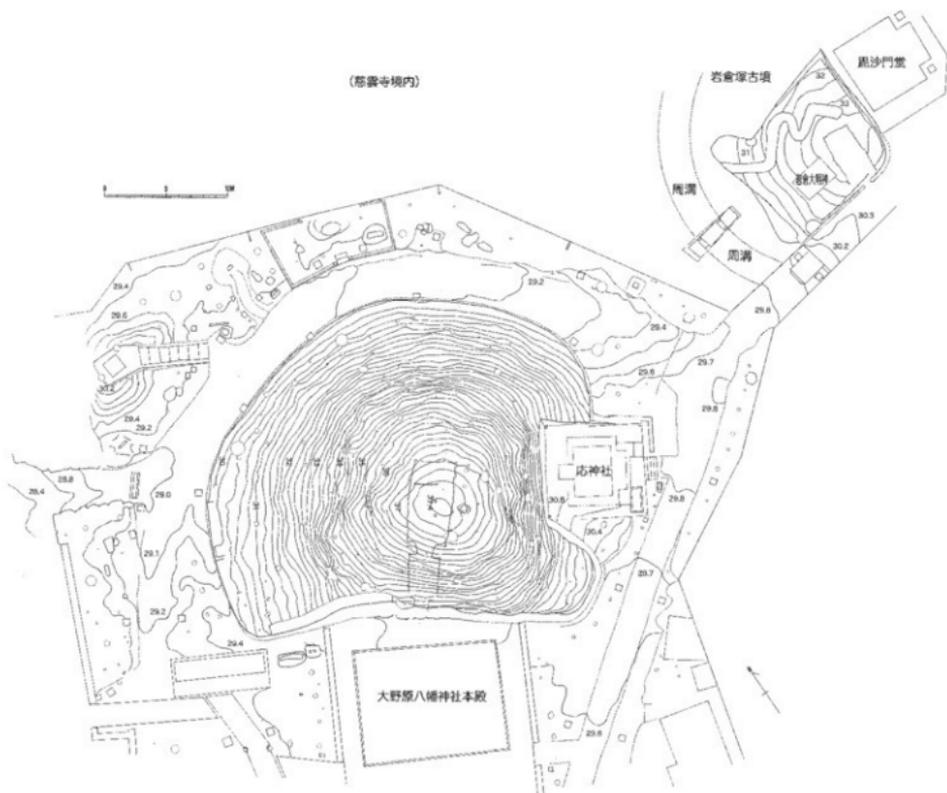
墳丘測量の結果は、現段階では直径約36m程度の円墳と推定できるが、今後の範囲確認の結果により墳形も含めて判断したい。また、現在の墳丘の頂上部の標高は37.4mで周囲との比高差は約8mある。石室天井高(約32.5m)との標高差が約5mある状態である。これほどの盛上り築造当初からされていたのであろうか。後世に何かの理由で二次的に盛上りが行われた可能性を指摘しておきたい。

なお、現在の石室の状況は、左側壁中段の石材が抜け落ち転落している箇所や、同じく左側壁奥壁側の基礎石が割れているなど一部その保存が危惧される箇所がある。

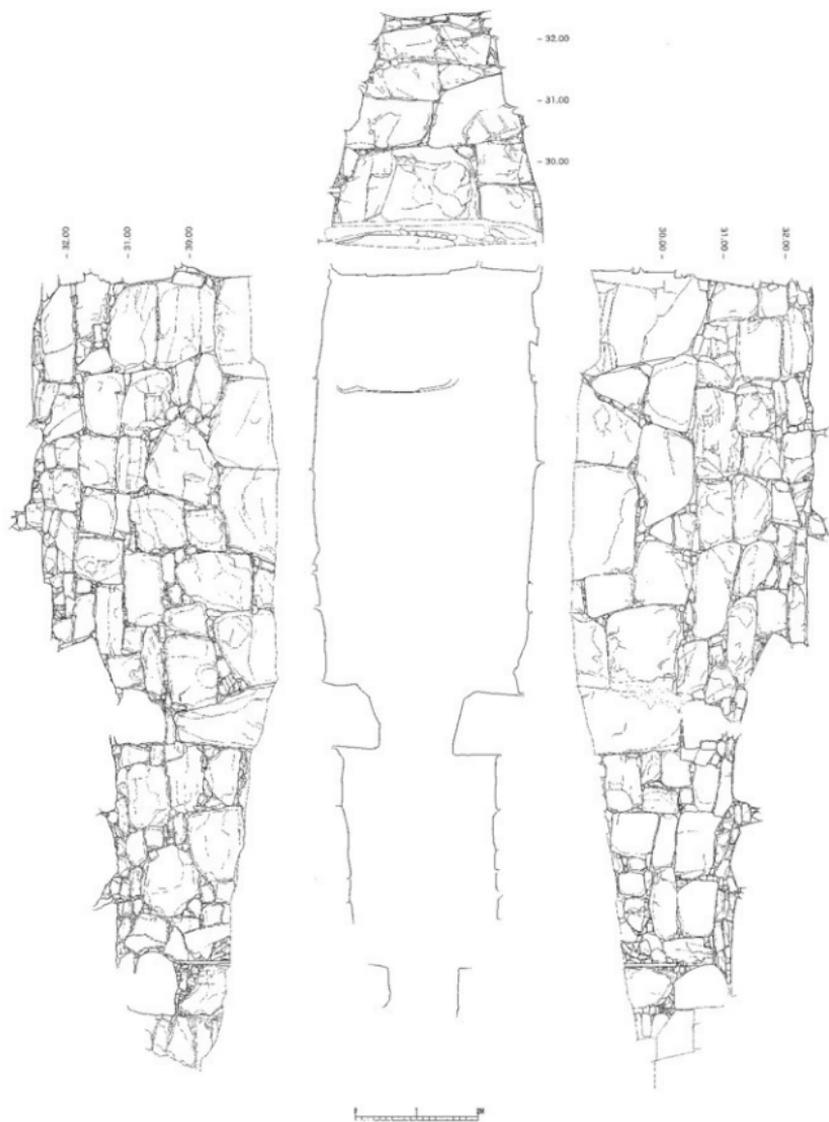
(2) 平塚(調査期間:平成19(2007)年12月17日~平成20(2008)年4月24日)

現存している横穴式石室の石室全長は13.06mである。そのうち玄室長は右側壁で6.38m、左側壁で5.93mあり、右側壁が0.45m長い構造をとっている。これは、左右の玄門立柱が左右対称ではなく少しずれて配置されていることによる。玄門立柱の長さは右で0.85m、左で0.97mあり、羨道長は右で5.83m、左で5.53mを測る。

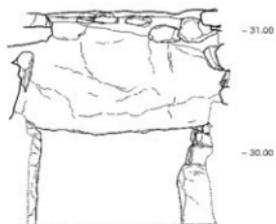
石室幅は、玄室奥壁で2.68m、玄室中央部で2.87m、玄室玄門側で2.9mあり、奥壁が一番狭く、玄門に近づくにつれ徐々に広くなる平面プランとなっている。玄門部では玄門立柱が石室内側に突出する形態をとり幅1.78mある。なお、羨道では玄門側で2.47m、羨道中央部で2.47m、石室開口部で2.28mを測り、石室内に流入している土砂を考慮す



椀貨塚古墳墳丘測量図 (S=1/400)



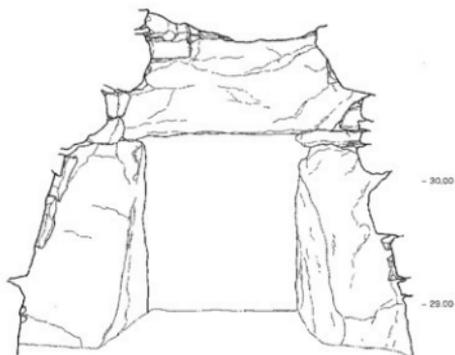
椀貨塚古墳石室実測図(1)



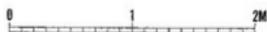
石室開口部（前室側）



玄門部（前室側）



玄門部（玄室側）



椀箕塚古墳石室実測図(2)

ると羨道幅はほぼ一定のものと推測される。

石室高は奥壁部で2.42m、玄室中央部で2.55m、玄室玄門部で2.58m、玄門部で1.53m、羨道玄門部で2.11m、羨道中央部で1.69m、開口部で0.8mである。しかし、この計測値はいずれも現況であり、石室内への土砂の流入が開口部で1m以上あることや玄室奥壁側においても雨水の流入に伴い土砂の流入が観察できることから床面までにはまだ数十cmあるものと推測されることなどから、実際の数値は床面検出の機会を待たなくてはならないが、現時点では約3m程の石室高ではないかと想定している。

平塚古墳の石室の最大の特徴は玄門部にある。左右の玄門立柱は楣石を兼ねる天井石（奥壁から4石目）を支えているのではあるが、立柱石に比して天井石があまりにも大きくバランスが悪い状況が見取れる。よって立柱石のみで荷重を受けるには貧弱であるため、それを支える補助的な役割の石材が必要となったのであろうか。立柱石に接してすぐ玄室側に左右の側壁から内側に突出するように石材が設置され立柱石と一緒に天井石を支えている状況がある。この天井石は玄室から見ると広いきれいな前壁を形成しており、その存在が非常に印象的である。恐らく、石室を構築する際には、まずこの石材を石室のこの位置に設置することが最初に決められていたのではないかと思わせるものである。要するに、用意した重要な意味を持つ石材が少し大きめのものであったため、準備していた立柱石では力学的に不安があり、石室構築過程で急遽補助のための支え石を設置したのではないかと推測される。このようなケースは他に余り類例がない形態である。

第2の特徴は、羨道部の天井石に一石ではあるが花崗岩を使用していることである。先行する椀貸塚では花崗岩は一石も使用されず、平塚より新しい時代の築造と考えられている角塚では天井石の全てと玄室の主要な石材が花崗岩で構成されるように変化することにより、平塚の石室は和泉砂岩中心の石室から花崗岩中心の石室へと移行する過渡期のものであることを示す好事例であると考えられる。

第3は、椀貸塚で多く確認できた詰め土はこの石室では余り確認できなかった。唯一、羨道右側壁と玄門立柱が接するところに確認することができた。もう少し石室の状態が良ければもっと多くの箇所で見詰め土が残存していた可能性があるが、雨水の浸入や結露が大きく影響していると考えられる。

第4は、玄室左側壁が概ね4段に目地が通り整然と構築されているが、右側壁は比較的大きめの石材をダイナミックに使用し側壁を造っているのが観察できる。椀貸塚でも同様な傾向があることから、石室を構築する際の左側壁の持つ意味について今後考察が必要である。

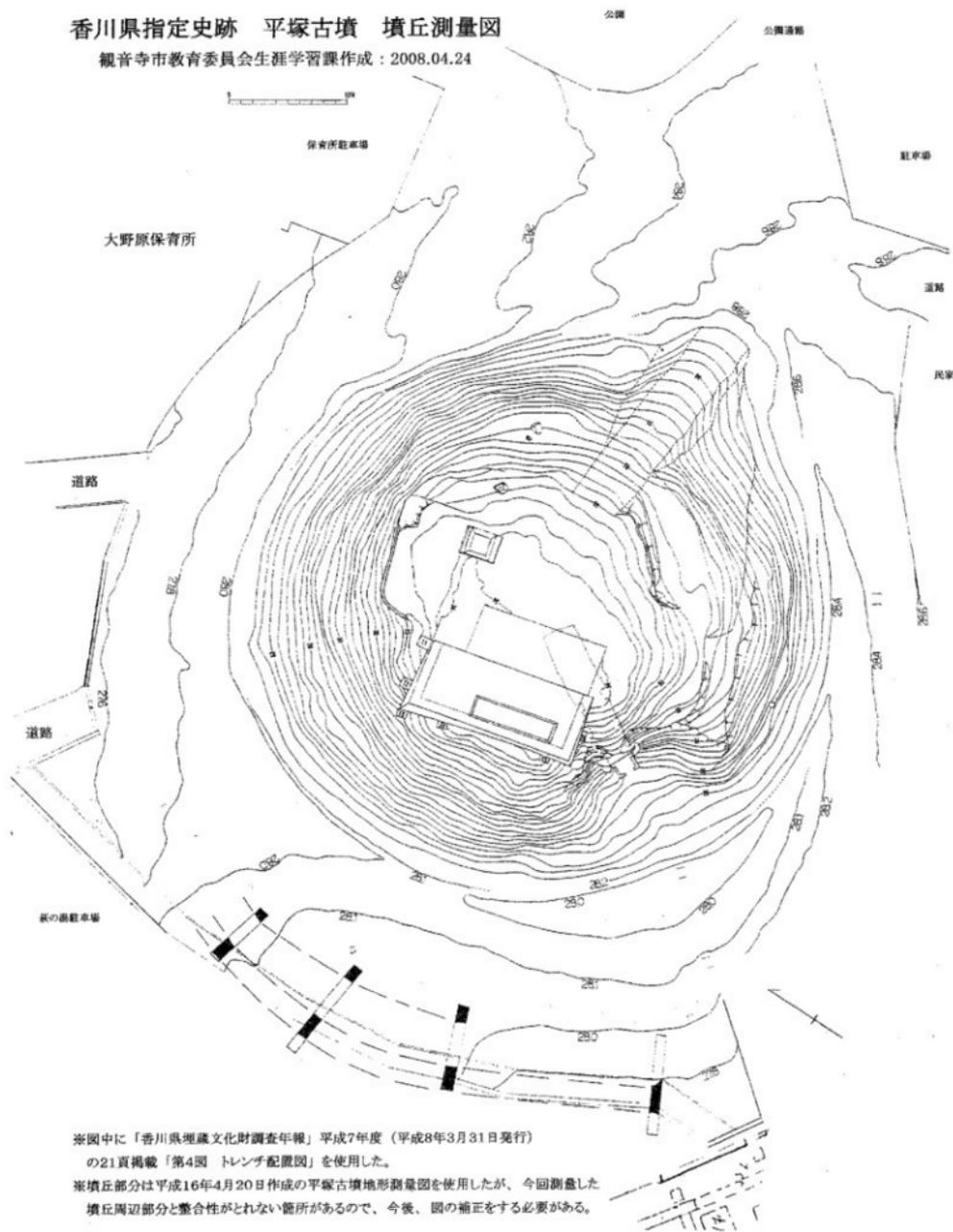
最後に、石室内部には椀貸塚古墳と同じ平成9年度に支保工が石室全体に設置されているが、10年経過した現在はその一部は早くも老朽化している。また、最も危惧されることは、降雨があるときに玄室奥側の天井石間から雨水が浸入してくることである。これは現在の石室天井標高と墳丘頂部標高の比高差がわずく2.3m程しかなく、天井石の厚みを考慮すると盛上はわずく1m程度であることに原因があると考えられる。この石室内への雨水浸入防止策の検討と実施が保存のために取り組まなければならない第一の課題であるといえる。

(3) 角塚（調査期間：平成20（2008）年5月22日～平成20年9月11日）

石室全長は、石室開口部が土砂の流入により不明な点が多いが、現在確認できる石室全長は右側壁で9.70m、左側壁で10.15mを測る。玄室長は右側壁で4.68m、左側壁で4.34mである。この差は玄門立柱の大きさによるものと思われる。石室全長のうち玄門立柱の現床面で占める長さは右で0.80m、左で1.16m、左が0.36m長く大型のものを使用している。

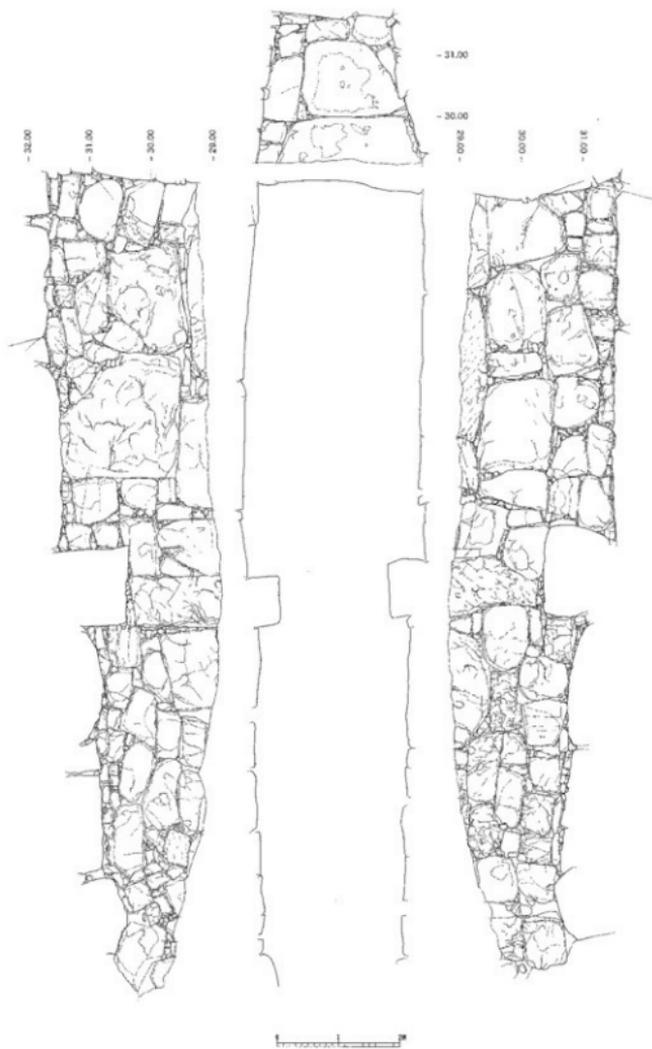
香川県指定史跡 平塚古墳 墳丘測量図

観音寺市教育委員会生涯学習課作成：2008.04.24

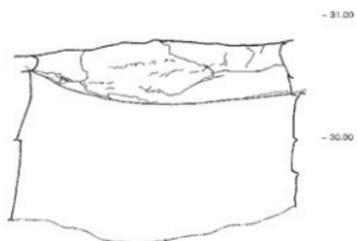


※図中に「香川県埋蔵文化財調査年報」平成7年度（平成8年3月31日発行）の21頁掲載「第4図 トレンチ配置図」を使用した。

※墳丘部分は平成16年4月20日作成の平塚古墳地形測量図を使用した。今回測量した墳丘周辺部分と整合性がとれない箇所があるので、今後、図の補正をする必要がある。



平塚古墳石室実測図(1)



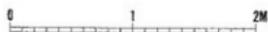
石室開口部 (内側)



玄門部 (羨道側)



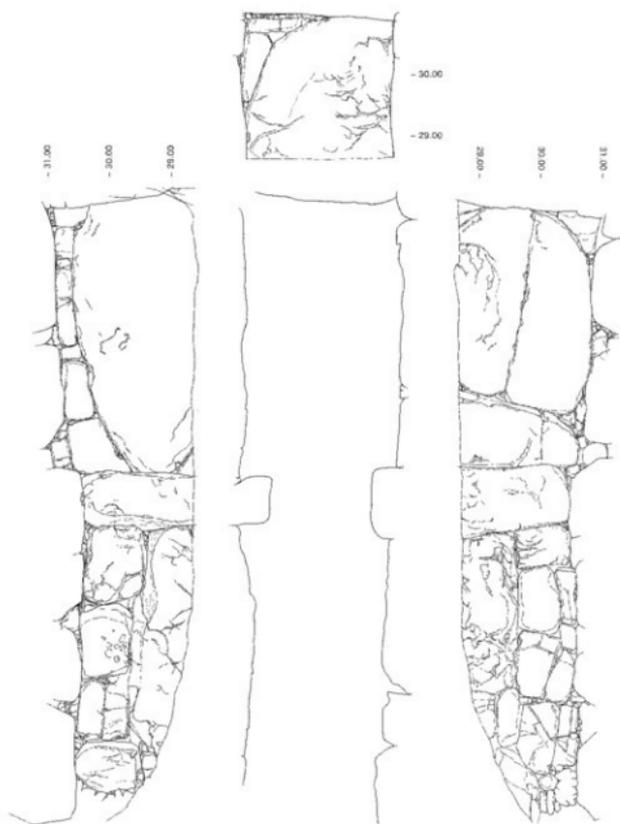
玄門部 (玄室側)



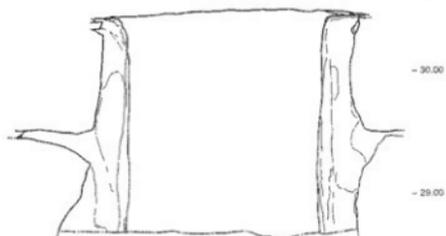
平塚古墳石室実測図 (2)



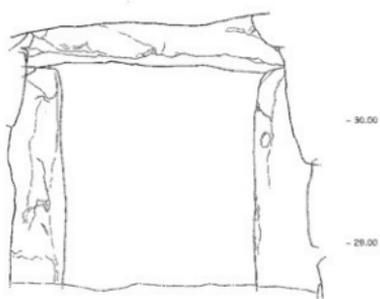
角塚古墳墳丘実測図 (S=1/400)



角塚古墳石室実測図(1)



玄門部（羨道側）



玄門部（玄室側）



角塚古墳石室実測図（2）

石室幅は、玄室奥壁部で2.40m、玄室中央部で2.58m、玄室玄門部で2.54mであり玄室全体を通じて玄室幅の差はあまり見られない。このことは玄室に配置されている石材が奥壁1石、右側壁1石、左側壁2石の花崗岩製の巨石で構成されていることによるものと思われる。つづいて玄門部は1.66m、羨道の玄門側は2.41m、中央部は2.08m、開口部は2.13mとなっている。

石室高は、現状床面で奥壁部が最大高で2.42mを測る。玄室中央部では2.20m、玄門部で約1.8m、羨道中央部で約1.76mとなっており、奥壁が一番高く、玄室で徐々に低くなり、玄門部から羨道にかけてはほぼ水平な形態をとっている。なお、石室天井石はすべて(6石)花崗岩を使用している。また、玄門立柱上部に架橋される石材は、椀貸塚の「榎石」や平塚の「前壁を構成する石材」のようなものではなく、普通の天井石として使用されており、石室ごとの変化の過程を見ることができる。

墳丘は、これまで一辺43mほどの方墳とされてきたが、墳丘北側は現在幅約5mの道路となり、東側及び南東側、西側の一部は墓地になっており、地形測量結果からは墳形について方墳であるという明確な根拠を説明することは困難な状況である。平成5年に中央公園造成工事の際の確認調査では4箇所のトレンチで周溝復元ラインを想定しているが、その一部は現在残されている墳丘に確実に届いており素直には受け入れられない。また、後段に掲載している昭和30年頃の航空写真を見ると墳丘の北側の道路部分が、方墳であれば直線であればよいものが、その部分が弧を描くように丸い形状であることが観察できる。このことから、角塚の墳形を再考する必要があるのではないかと考えている。さらに、方墳ではなく仮に円墳であるとすると地形測量の結果では直径50mを超える規模になり平塚に匹敵するものとなる。いずれにしても、もう一度、墳形を含めた古墳の範囲を確認しておく必要があるのではないかとと思われる。

(4) 基礎調査のまとめ

平成19年2月から平成20年9月までの1年7ヵ月の間、椀貸塚、平塚、角塚の順で石室実測と墳丘測量等を行い現状での基礎的な資料を得ることができ、それまでの略測図のみの状態からは脱することはできた。さらに、椀貸塚の石室内各所と平塚の一部に残されている「詰め土」の存在の確認など新知見もあり、古墳群の文化財価値を検討するうえで一定の調査成果を挙げることができた。しかし、出土遺物が無いことにより築造年代の絞り込みができないことや、古墳の範囲等も不明瞭であり、今後に残された課題は多い。

また、3古墳以外の古墳にも注意を払わなければならない。特に、椀貸塚近くの岩倉塚については、平成20年11月～平成21年2月に実施した確認調査ではTK43型式の須恵器が出土していることや墳丘規模が30mを超えるものであることなどが成果としてあり、大野原古墳群を単純に3基のみの古墳群として扱うことが、もはや意味をなさない状況となっている。三大古墳に岩倉塚を加えて四大古墳として視点を考えることや、かつては170基あったといわれる古墳群内での位置付けを考えること、同時期に存在している母神山古墳群との関連などを総合的に分析・考察しておく必要性がある。

最後に、椀貸塚、平塚、角塚と岩倉塚には興味深い共通点がある。それは4基の各石室床面がほぼ同レベル(標高28.6m前後)に構築されていることである。扇状地上に築造された地形的な要因も影響していると思われるが、椀貸塚から370m～550m離れた場所での一致については単なる偶然のものとは考え難い。この地域における半世紀以上にわたる古墳築造の過程において被葬者たちの他界観が意識的計画的に受け継がれていた可能性を想定しておくべきではないだろうか。

椀貸塚・平塚・角塚古墳石室計測データ

(単位:m)

椀貸塚古墳			平塚古墳			角塚古墳		
石室長			右側壁	左側壁		右側壁	左側壁	
石室全長	12.10	現存長(羨道未確認)	13.06	12.43		9.70	10.15	
(前室袖石長)	0.72							
(前室長)	3.49		5.83	5.53	(羨道長)	4.22	4.65	(羨道長)
(玄門袖石長)	1.09		0.85	0.97		0.80	1.16	
(玄室長)	6.80		6.38	5.93		4.68	4.34	
石室幅								
奥壁部	3.45		2.68			2.40		
玄室中央部	3.58		2.87			2.58		
玄室玄門部	3.12		2.90			2.54		
玄室最大幅	3.64		2.96			2.58		
玄門部	1.28		1.78			1.66		
前室玄門側	2.44		2.47		(羨道玄門側)	2.41		(羨道玄門側)
前室中央部	2.37		2.47		(羨道中央部)	2.08		(羨道中央部)
前室袖石側	計測不能		2.28		(石室開口部)	2.13		(石室開口部)
前室袖石部	1.11							
石室高			右側壁	左側壁		右側壁	左側壁	
奥壁部	3.77	推定	2.42	2.26		2.42	2.36	
玄室中央部	3.86		2.55	2.50		2.20	2.19	
玄室玄門部	2.77		2.58	2.51		2.27	2.38	
最大高	3.86		2.58	2.51		2.42	2.38	
玄門部	1.55		1.53	1.54		1.82	1.76	
前室玄門側	2.15		2.11	2.18	(羨道玄門側)	1.77	1.73	(羨道玄門側)
前室中央部	1.92		1.69	1.78	(羨道中央部)	1.76	1.83	(羨道中央部)
前室袖石側	1.71		0.80	1.22	(石室開口部)	1.08	1.14	(石室開口部)
前室袖石部	0.77							

※石室内床面未検出、石室内へ土流入りや石室開口部の破壊等により、計測数値は現状の数値である。

【香川県指定史跡橿貸塚、角塚及び平塚古墳保存・活用検討委員会からの報告書】

～大野原古墳群の保存と活用のために～

I 大野原古墳群の文化財的価値

香川県観音寺市大野原町大野原に所在する香川県指定史跡「橿貸塚、角塚及び平塚」古墳が築造された年代は橿貸塚が6世紀後葉、平塚が7世紀初め、角塚が7世紀の第二四半期に概ね位置付けられる。このことは、その石室規模や構造を観察し他の類別と比較することで、その変化の過程から推測が可能である。

特に、橿貸塚は玄室の規模については特筆すべきものがある。玄室長6.8m、最大幅3.6m、最大高約3.9m(現状値)を測り、床面積で22.3㎡、同容積ではおおよそ80㎡となる。このことは、四国内の各地での最大規模はせいぜい母神山鑑子塚クラス、すなわち床面積10～12㎡程度であるのに対して、橿貸塚のそれはそれらの2倍となる。また、時代の多少の前後はあるが畿内中樞部の横穴式石室と対比しても、床面積では奈良県見瀬丸山古墳(推定30㎡+α)、同石舞台古墳(27㎡)に準じ、奈良県牧野古墳(22.4㎡)、同塚穴山古墳(21.8㎡)に匹敵する。対岸の吉備地域では例外的に巨大な横穴式石室であるコウモリ塚古墳(28㎡)、箭田大塚古墳(26㎡)などがあるが、これにも準じる規模となっている。

橿貸塚から平塚、角塚への変化は、一連の連続性をみとめることができ、この点についても注目すべきである。北部九州的な要素がしだいに失われて、畿内的な要素が強くなっていく状況が看取できる。その一特徴としては石材の大型化や壁面の平滑化が進んでいくことにあり、この変遷は同時期の多くの地域で見られるもので、当該古墳群もそのような流れの典型として理解することができる。

なお、墳丘規模については今後墳形を含め範囲等の確認を慎重に行わなければならないが、これまでの墳丘測量調査の結果では、橿貸塚が直径36m、平塚が直径52m、角塚が約50mの規模を誇ると推定され、いずれも大形の墳丘を有し、同時期のものからは群を抜く存在である。

以上のように、当該古墳群はその築造時期差などから三代にわたるものとみられる。三基の古墳は歴代、四国地域で最大規模の横穴式石室を内蔵し、墳丘規模の点でも他を圧倒している。特に橿貸塚の玄室規模(床面積、容積)は、畿内地域の最有力墳石室に準じたものであり、畿外諸地域の通常クラス盟主墳の石室規模からは抜きん出た規模であると評価することができる。このような傑出した内容の大型墳が三代にわたり、近接した場所に連続的に築造されたことは古墳時代後期にあっては稀な存在である。四国地域はもちろん列島全体を見渡しても類例は乏しいと思われる。かつ、横穴式石室が比較的良好な状態で保存されていること、日常的にその状態を子細に観察できる点は高い意義を持ち、特別な付加価値のある極めて文化財的価値の高い重要な遺跡である。

なお、江戸初期の開村以来、橿貸塚は大野原八幡神社と一体のものとして、平塚は秋祭りのお旅所として活用され、まさに地域文化の核でありシンボルとしての役割を果たしている。このように長年に渡って重要な遺跡が神社関係者をはじめ地域の人々によって今日まで大切に守られてきた功績に敬意を表したい。

II 大野原古墳群の現状

本章では、橿貸塚、平塚、角塚の石室実測や墳丘測量などの基礎調査から明らかになった現状と保存管理上の問題点等を古墳ごとに指摘しておく。

① 橿貸塚古墳

石室内は平成9年度に支保工が設置され現在も同様な状態であるが、石室実測調査の際に腐食した木材の多くは除去し、床面に散乱していた木材の腐食破片の清掃作業を行ったことで、以前の絶望的に荒廃した状況からは一時的ではあるが脱した感がある。しかし、

石室左側壁の奥壁近くの部分については、一石が側壁から抜け落ち外側の盛土層が見える状態であり、また別の箇所には、石材が二つに割れているが微妙なバランスで上部の石材がそれを押さえて側壁が保たれているものもあり、支保工が設置された理由もこの箇所にあると思われるので、この箇所に関しては今後何らかの補強対策の実施が最優先課題である。

また、石室が前述のような状態であることから万が一石室が崩壊してしまう可能性もはらんでおり、石室実測図は作成しているが、念のために3次元レーザー計測など最先端の技術を活用し科学的な詳細データを得ておくことも肝要である。神社境内の玉垣に囲まれた本殿背後に存在する椀貸塚の特殊な立地環境を考慮するとともに、今後の公開や活用を考えた場合必要な措置であると思われる。

次に、古墳の範囲を確認しておくことも必要である。神社境内には様々な施設が存在し条件的に制約はあるが、古墳の文化財的価値を評価するには墳丘規模や周溝などを含めた全体的な古墳の範囲が大事な要素なる。さらに、石室の全体像（全長等）も不明な点がありこの点についても課題を残している。

最後に、残念ではあるが、これまで椀貸塚から出土した須恵器など築造時期を推定できる遺物が確認されていない。築造時期が推定できる須恵器があると大野原古墳群の成立を考える場合きわめて重要な資料になり、近接する岩倉塚や少し離れてはいるが母神山古墳群の籾子塚との前後関係で椀貸塚の位置付けが可能になり、その存在の有無により大きく意味合いが変わってくるので、今後の遺物の発見に期待をしたい。

② 平塚古墳

石室には椀貸塚と同様に支保工が設置されている。同様に石室実測の際に腐食している木材は除去し内部の清掃を行っている。平塚については玄室部分の天井石の間から雨水の浸入が見られ、この点が石室の保存に大きく悪影響を与えていると思われる。石室実測調査中に降雨があると余り時間をおかずに石室内へ雨水の浸入を観察することができた。雨水が浸入することで同時に天井石上部の盛土を石室内へと流入させているものと考えられ、今後、早急に防水工事等の対策が必要である。築造当初はもう少し盛土があったのかもしれないが、現在の墳頂部と天井石上面間の盛土は1m余りと考えられ、非常に薄い盛土しか残されていない状態に起因するものと思われる。

次に問題となるのは、椀貸塚と同様に古墳の範囲確認や時期の確定である。特に、墳丘や全体的な範囲については注意が必要である。平成7年に県教委がトレンチ調査をした際には墳丘の南西側に周溝らしき遺構が連続した位置で確認されており、それらが平塚と一体のものであるかどうかを確認し、古墳全体の範囲を確定する作業が必要である。もし、前述の溝が平塚の周溝であると確認できれば直径80m超の墓域を有する古墳になり遺跡の評価を大きく上方修正する必要が生じることになる。また、本古墳についても出土遺物は確認されておらず時期の特定は大きな課題となっている。

③ 角塚古墳

角塚については椀貸塚、平塚に設置されているような支保工は設置されておらず、石室の公開・見学については現在のところ特段の支障はないと思われる。

本古墳は以前から方墳であるとされてきたが、昭和30年頃の航空写真を見る限りは方墳とするには少し無理がある旧状であることが判明した。また、平成5年度に実施された中央公園の造成に伴う角塚の確認調査の報告書に周濠外縁復元プランが方墳で示されているが、一部現状とは整合性がとれない箇所があるので、再度、墳形を含めた墳丘規模を見直す必要性がある。しかし、残念なことに墳丘の北側は道路が墳丘を削り取るように通され、東側については広範囲に墓地化されていることから、墳形等を確認できる範囲はごく限られた区域しか残されていないのが現状である。今後、角塚の位置付けに大きく係わることであるので慎重な確認調査を実施しておく必要がある。

また、本古墳においても出土遺物は確認されておらず具体的な築造時期は判明していな

い。その石室構築形態などから7世紀第二四半期と推定しているのであるが、今後もう少し具体的な時期を示す須恵器等の出土が期待される。

III 大野原古墳群の保存・活用を図るための課題と方策

椀貸塚・角塚・平塚の保存・活用を考えるためには、本古墳群が置かれている現状と抱えている課題を整理する必要がある。これらの課題を解決、あるいは是正することが将来的な保存と活用につながる。すなわち整備計画ということになる。

以下、本古墳群に共通する全体的な問題と個々の古墳に分けてそれぞれの課題を記す。

①全体的な課題

本古墳群の価値・歴史的意義を積極的に発信し、地域文化・歴史的環境の核として市民の地域に対する誇りを育てていくことが重要である。すなわち、全国的に見ても巨大な石室を持つ古墳群であること、大野原が四国における古墳時代の一中心地であったことを示していること、当時の文化・歴史的背景などを三古墳の整備とともに市民に伝えていく必要がある。このためには古墳群の近くに資料館等のガイダンス施設が望まれる。

三古墳以外の古墳を含めて古墳群を連絡する見学路、道標、説明板、パンフレットなども整備したい。見学路整備は、新たに専用の歩道を設けるということではなく、ルート上にある既存の歩道の舗装を専用の仕様に換えることや、統一されたデザインの道標の設置などである。

また、古墳群の特徴である巨大な石室を実感してもらうには、石室に入ることが最善である。ただし、公開ということになれば見学者の安全確保が大前提であることも言を俟たない。当面、石室内部まで入れるのがむずかしいのであれば、入口から石室を見学する施設の整備が必要となる。このときに内部が見て取れる照明が欲しい。

三古墳の墳丘の広がりや周濠の有無については現状では調査データがなく、不明である。今後の発掘調査でこれらの成果が得られれば、可能な部分での復元的な整備、あるいは平面的な表示を行うことや、本来の形状を説明板で解説する必要がある。

墳丘上に生育している樹木については、封上の流亡を防ぐ役割とランドマークとしての効用の二つのプラス面がある。一方、樹根による石室に対する悪影響や墳丘の形状を見えにくくするマイナス面がある。石室に影響している樹木は伐採するよりないが、墳丘形状を見えにくくしている樹木は下枝を整理することで改善できる。

古墳群がある場所は大野原町の中心部に近く市民が足を運ぶのには便利なのであるが、反面、市街化が進み、歴史的環境・景観は阻害されつつある。市の土地利用計画や景観計画に古墳群を重要な要素と位置づけて、古墳にとって望ましい景観を確保できうる計画を策定する必要がある。

②椀貸塚古墳

大野原八幡神社の本殿背後にある円墳である。本殿を建てる際に墳丘南辺部を削平し、削られた法面を石積で土留めしている。この時に石室の羨道部などが破壊され、現状は石積面に石室が開くという特異なあり方を示している。本殿と石積面との間が狭く、本殿を囲む玉垣を墳丘にあてて本殿と石室前面間の通路を閉鎖している。また本殿周囲の地面は石室前室床面よりも50cm高い。したがって、開口部から石室に入るには小さな口から前室床面になる形となり、簡単に入ることはできない。通常は玉垣で閉鎖されていることと、開口部の状況から、一般の見学者を受け入れることがむずかしい現状である。

こういう現状ではあるが石室の公開をどうするのが問題である。限定的な公開とせざるを得ないと思うが、玉垣部に石室公開のための入口を設けることや、石室開口部を入り易く改善することなどが課題であろう。石室を公開する場合は、石室の安全性を確保することが必要である。

もう一点は雨水が開口部から石室内に入らないよう措置することである。開口部周囲の

地面を外側に向かって低くすることや、場合によっては周囲に排水溝を設ける必要もあろう。

③平塚古墳

平塚での問題は、墳丘上で行われる祭りに伴う神輿台の設置やのぼり道整備によって封土の削平や形状の変化がある。頂上部の封土が薄くなったことが一つの要因となり、石室への水の浸入が見られる。簡便な対策としては石室の上部に防水シートを敷く方法がある。また、薄い封土上に生えた樹木の根による石室石組の破壊も懸念される。石室直上の樹は伐採すべきであろう。

また、祭りのために作られた平場やその土留め石積については、本来の墳丘を理解する上で大きな障害となっている。祭りとの調整が必要であるが、古墳の保護・活用と両立できるあり方を検討していただきたい。

墳丘裾部の現状はなだらかに周囲の道路に接しており、このために墳丘内への車の乗入れ・駐車が多い。墳丘の範囲を確認し、裾部を表現することにより、墳丘の明示と車の進入を制限すべきである。

④角塚古墳

角塚は、東側が共同墓地となっており、この墓地造成のために墳丘東辺部が削平され、石積で土留めされている。特に東北部にある焼却炉は墳丘を壊しているだけではなく、景観的にも大きなマイナス要因となっている。墳丘から離れた場所への移設もしくは廃止を検討すべきであろう。これが叶えば封土を復元的に整備し、墳丘を保護することができる。

角塚の南側は大野原中央公園と接している。また、同公園を挟んだ南側には平塚がある。しかし、この公園計画には角塚や平塚のことはほとんど考慮されていない。本公園が両古墳のジョイントの役目も果たしているのであるから、両古墳をつなぐ見学园路としての機能や、公園内からの両古墳への美しいビスタを形成する配慮が欲しい。また、歴史的景観とはほど遠いデザインの公園施設の改善も望まれる。公共施設が自ら範を示さないことには、民間の施設や住宅などのデザインコントロールは理解を得ることができない。

角塚の南側は墳丘や周濠の復原も可能であるし、石室の公開についても支障なくできる。三古墳のなかで復元的な整備に支障がないのは、現状ではここだけであるから是非検討していただきたい。

墳丘上の樹木ではシュロが何本か繁茂しているのが気になる。伐採すべきであろう。

以上がおもな課題と方策であるが、この他に公開・活用のための具体策を以下に列記しておく。

- ・公開については、他自治体においても取組があるように、年1回程度は一般公開日を設けるべきである。これについては観音寺市内に限らず同様な巨石墳が所在する県境を越えた四国中央市等との広域的な連携を行う公開事業を実施することも斬新かつ有効な方法である。
- ・上記の公開事業に関連し、毎年定期的な見学会や説明会を開催するなど継続的に実施すべきである。啓発用パンフレットの作成は言うまでもなく、市役所ホームページについても専用ページを作成し内容の充実を図るべきである。
- ・小、中学校等に対しては、ふるさとの価値ある文化財を体感する機会を積極的に設け、次世代へと確実に引き継がれるように図らなければならない。
- ・大学等の研究者を招いてのシンポジウム等は普及・啓発を図るうえで一つの大きな手段であり、古墳群の保護や文化財の愛護機運を盛り上げるための大きな起爆剤とならうので、ぜひともその開催が望まれる。
- ・文化財を将来にわたって守り伝えるためには、行政の文化財担当部局だけでは不十分である。市役所全体と市民が密接に連携した日常的な活動が必要である。例えば、文化財の見学者に対して説明や案内を行う文化財ボランティアガイドの育成はその第一歩で

あり急務である。

IV 総括

椀貸塚、平塚、角塚は6世紀後葉から7世紀の第二四半期にかけて三世代にわたり連続的に築造された古墳群である。三基の古墳は歴代、四国地域で最大規模の横穴式石室を内蔵し、墳丘規模の点でも他を圧倒している傑出した存在である。このような事例は古墳時代後期にあっては列島全体を見渡しても極めて稀で類例は乏しい。特に、椀貸塚の玄室規模（床面積、容積）は畿内地域の最有力墳の石室に準じた規模であり、まさに全国クラスのものであると高く評価できる。

このように、保存・活用検討委員会で古墳群の文化財的価値を認めているが、今後の保存や活用を図るには多くの課題がある。これらは、すぐにできることもあれば、長期的に取り組むべき課題もある。ただ現状のままでは宝の持ち腐れとなるのは必至である。この価値ある歴史遺産をまちづくりに生かすとともに、地域の誇り・宝として次世代へと伝えなければならない。そのためには文化財、教育委員会の垣根を越えた市全体としての総合的な取組が求められる。

最後に、検討委員会では大野原古墳群の保存・活用をより効果的に進めていくためには、その文化財的価値により国指定史跡への道も有効な選択肢の一つであると判断するに至った。

その理由として、

- ① 文化財を保存するためには厳格な法規制が必要であること、
- ② 保存のための技術的指導や補助金等の措置が受けられること、
- ③ 国指定文化財であるという、金銭では買うことができない特別な付加価値がつくこと、などが挙げられる。このことにより、観音寺市独自の文化を学術的、法的裏付けを持って全国発信することが可能となり、観光的側面からも有用な資源になることは言うまでもなく、さらには未来を担う子ども達がふるさとの文化を理解する格好の学習教材となりうることなどの多面的な効果が期待できる。但し、そのような場合になったとしても、実際の日常的な管理や修復等の業務には専門的知見や技術を伴うことが不可欠であるので、市としてしっかりとした人材育成や管理体制を整えておくことが重要である。

観音寺市を代表する、また全国的に誇れる貴重な歴史遺産である「椀貸塚、角塚及び平塚」の恒久的な保存、有効活用が図られるよう願ってやまない。

平成21年3月30日

観音寺市長 白川晴司 殿

香川県指定史跡椀貸塚、角塚及び平塚古墳保存・活用検討委員会

会 長	守 羽 貞 和
副会長	丹 羽 佑 一
委 員	高 瀬 要 一
委 員	大久保 徹 也
委 員	菱 田 哲 郎
委 員	横 山 照 美
委 員	柘 植 宗 尚

4. 参考資料 I (文献等)

	頁
(1) 大野原古墳群関係文献一覧表	28
(2) 『大野原開墾古図』(正保2年(1645))	29
(3) 『御宮相續二付万事覚帳』(貞享2年(1685))	30
(4) 『名東縣下第廿四大區四小區 讚岐國豊田郡大野原村地圖面五拾五冊之内 拾 從千三百九十六番至千五百八十六番』(明治6年(1873))	31
(5) 『香川県讚岐國三豊郡大野原村 鎮座 郷社八幡神社之景』 (明治35年(1902)) ※町制25周年 写真は語る百年のあゆみ 大野原町 より転載	31
(6) 岩倉塚古墳関係資料	32

(1) 大野原古墳群関係文献資料一覧表

梶袋塚古墳	『新修 大野原町誌』 H17.2.27 大野原町
	『観音寺市内遺跡詳細分布調査報告書—大野原町編—』 H20.3.31 観音寺市教育委員会
	『香川県文化財年報』 H20.2.29 香川県教育委員会
	『香川の文化財』 H8.3 編集 香川県教育委員会 発行 香川県文化財保護協会
	『文化財協会報 第2号』 H20.3.1 観音寺市文化財保護協会
	『大野原町誌』 S31.8.15 大野原町
	『香川県三豊郡史』 S48.4.11 三豊郡役所
	『復刻版 史蹟名勝天然記念物調査報告 下巻』 S50.2.10 香川県など
	『新編 香川叢書 考古編』 S58.3.31 香川県教育委員会
	『全国古墳編年集成』 1997.6.25 石野博信編
	『香川の文化財』 H8.3 香川県教育委員会編
	『大野原町の文化財』 S59.3.10 大野原町
	『大野原開墾古図』 正保2年(1645)
	『御宮相續二付万事覚帳』 貞享2年(1685)
平塚古墳	『新修 大野原町誌』 H17.2.27 大野原町
	『観音寺市内遺跡詳細分布調査報告書—大野原町編—』 H20.3.31 観音寺市教育委員会
	『香川の文化財』 H8.3 編集 香川県教育委員会 発行 香川県文化財保護協会
	『大野原町誌』 S31.8.15 大野原町
	『増補 西讃府志』 S4.11.3 舊丸亀藩京極家
	『さぬきの遺跡』 S47.9.1 高橋邦彦ほか
	『復刻版 史蹟名勝天然記念物調査報告 下巻』 S50.2.10 香川県など
	『新編 香川叢書 考古編』 S58.3.31 香川県教育委員会
	『全国古墳編年集成』 1997.6.25 石野博信編
	『香川の文化財』 H8.3 香川県教育委員会編
	『大野原町の文化財』 S59.3.10 大野原町
	『名東縣下第廿四大區四小區 讃岐國豊田郡大野原村地圖五拾五冊之内 拾 從千三百九十六番至千五百八十六番』 明治6年(1873)
	『文化財協会報 第3号』 H21.3.1 観音寺市文化財保護協会
	『香川県三豊郡史』 S48.4.11 三豊郡役所
角塚古墳	『新修 大野原町誌』 H17.2.27 大野原町
	『観音寺市内遺跡詳細分布調査報告書—大野原町編—』 H20.3.31 観音寺市教育委員会
	『角塚—大野原中央公園造成工事に伴う確認調査概要報告—』 1995.3 大野原町教育委員会
	『大野原町誌』 S31.8.15 大野原町
	『増補 西讃府志』 S4.11.3 舊丸亀藩京極家
	『さぬきの遺跡』 S47.9.1 高橋邦彦ほか
	『復刻版 史蹟名勝天然記念物調査報告 下巻』 S50.2.10 香川県など
	『新編 香川叢書 考古編』 S58.3.31 香川県教育委員会
	『全国古墳編年集成』 1997.6.25 石野博信編
	『香川の文化財』 H8.3 香川県教育委員会編
	『大野原町の文化財』 S59.3.10 大野原町
	『名東縣下第廿四大區四小區 讃岐國豊田郡大野原村地圖五拾五冊之内 拾 從千三百九十六番至千五百八十六番』 明治6年(1873)
	『香川県三豊郡史』 S48.4.11 三豊郡役所
	『新修 大野原町誌』 H17.2.27 大野原町
『観音寺市内遺跡詳細分布調査報告書—大野原町編—』 H20.3.31 観音寺市教育委員会	
『岩倉塚古墳発掘調査現地説明会資料』 H15.2.9 大野原町教育委員会	
『復刻版 史蹟名勝天然記念物調査報告 下巻』 S50.2.10 香川県など	
『大野原町誌』 S31.8.15 大野原町	

(2)『大野原開墾古図』(正保2年(1645))



平田氏による大野原開発着手から2年目の正保2年(1645)に作成された大形の絵図である。これには用水路、建築物、開発者の名前、開拓予定面積等が詳細に描かれており当時の様子を窺える貴重な資料である。絵図の中央部には大野原八幡神社と枕貸塚と見られるものが描かれている。正面の高床の建物は本殿であると思われる。(2年後の正保4年(1647)に拝殿が建設されたという記録がある。)本殿背後には釣鐘状をした墳丘の枕貸塚が描かれている。墳丘には大木が1本生えているのみで、現在のような多くの樹木は繁茂している様子はない。横穴式石室の開口部は本殿の影になり具体的な状態はわからないが、墳丘をカットして土留めのために築かれたであろう石垣が表現されているので、恐らくは、すでに石室は開口していたのではないだろうか。また、太い線を外側に細い線を内側にした二重線で墳丘を取り巻くような表現がされているが、これが周溝を示しているものと考えられる。貞享2年の記録にある埋められた堀であろうか。

なお、枕貸塚近くの岩倉塚や平塚、角塚についてはこの絵図には描かれていない。絵図の全体像は『新修 大野原町誌』(H17.2.27)を参照のこと。

地蔵(差)	陸奥守	一 清殿兩端(傍)	一 陸奥守
一 三百四十八人 中社	一 三百四十八人 本社	埋(ト)夏	一 陸奥守
中社(差)	本社御座	一 一〇〇〇人 傍敷奉立	一 陸奥守
陸奥守(差)	社殿ノ方(三ノ間)居リ	一 一〇〇〇人 傍敷奉立	一 陸奥守
一 陸奥守 中倉	二 陸奥守 御座	一 今仕(存)の故	一 陸奥守
一 陸奥守 陸奥	二 陸奥守 御座	一 今仕(存)の故	一 陸奥守
一 陸奥守 元地	三 陸奥守 御座	一 今仕(存)の故	一 陸奥守
一 陸奥守 主位	四 陸奥守 御座	一 今仕(存)の故	一 陸奥守
一 陸奥守 三万八千人	五 陸奥守 御座	一 今仕(存)の故	一 陸奥守
陸奥守(差)	六 陸奥守 御座	一 今仕(存)の故	一 陸奥守
陸奥守(差)	七 陸奥守 御座	一 今仕(存)の故	一 陸奥守
陸奥守(差)	八 陸奥守 御座	一 今仕(存)の故	一 陸奥守
陸奥守(差)	九 陸奥守 御座	一 今仕(存)の故	一 陸奥守
陸奥守(差)	十 陸奥守 御座	一 今仕(存)の故	一 陸奥守
陸奥守(差)	十一 陸奥守 御座	一 今仕(存)の故	一 陸奥守
陸奥守(差)	十二 陸奥守 御座	一 今仕(存)の故	一 陸奥守
陸奥守(差)	十三 陸奥守 御座	一 今仕(存)の故	一 陸奥守
陸奥守(差)	十四 陸奥守 御座	一 今仕(存)の故	一 陸奥守
陸奥守(差)	十五 陸奥守 御座	一 今仕(存)の故	一 陸奥守
陸奥守(差)	十六 陸奥守 御座	一 今仕(存)の故	一 陸奥守

- (4) 『名東縣下第廿四大區四小區 讚岐國豊田郡大野原村地圖面五拾五冊之内拾 從千三百九十六番至千五百八十六番』(明治6年(1873))



- (5) 『香川県讚岐國三豊郡大野原村 鎮座 郷社八幡神社之景』(明治35年(1902))
(町制25周年記念 写真は語る百年のあゆみ 大野原町 より転載)



(6) 岩倉塚古墳関係資料

①岩倉塚古墳確認調査トレンチ配置図

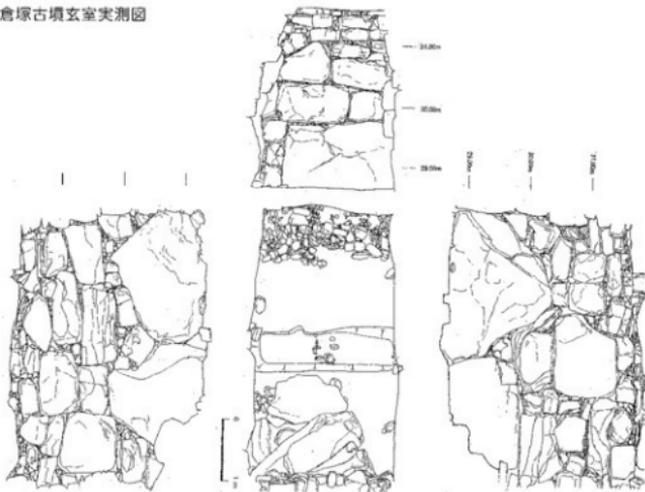
平成20年11月17日～平成21年2月2日にかけて大野原小学校校庭側で岩倉塚の確認調査を実施した。調査の結果、横穴式石室に伴う墓道、排水溝及び閉塞石とみられる遺構を確認した。また、トレンチ1から出土した有蓋高杯(須恵器)片は陶邑TK43型式に併行する時期と推定される。墳丘規模については、直径30mを超える規模になりうると推定される状況を確認した。



②岩倉塚古墳玄室実測図

平成14年11月29日～平成15年2月16日まで実施された『新修大野原町誌』編纂に伴う確認調査での岩倉塚古墳の玄室実測図である。(平成15年2月9日に実施された現地説明会資料から転載した。) 本石室の奥壁は母神山鐘子塚のものとはほぼ同規模であることから、現在大きく破壊を受けているが、それに匹敵する石室規模であることが想定される。

岩倉塚古墳玄室実測図



5. 参考資料Ⅱ(写真)

	頁
(1) 梶袋塚古墳・墳丘	34
(2) 梶袋塚古墳・石室開口部	
(3) 梶袋塚古墳・石室に設置された支保工(平成9年度設置)	
(4) 梶袋塚古墳・石室玄門部(前室から奥壁方向)(年代不明:昭和30年代?)	
(5) 梶袋塚古墳・石室奥壁部(年代不明:昭和30年代?)	
(6) 梶袋塚古墳・玄室床面の状況(年代不明:昭和30年代?)	35
※左側壁の石材が半分に分割れ、抜け落ちた石材が床面中央部に見える。	
(7) 梶袋塚古墳・上記の石材が抜け落ちた跡の状況	
※外側の墳丘の盛土層が観察できる。	
(8) 梶袋塚古墳・玄室左側壁(壁奥から2石目)の石材の割れの状況	
(9) 梶袋塚古墳・石室内の「詰め土」の状況	
(10) 平塚古墳・墳丘	
(11) 平塚古墳・石室開口部	36
(12) 平塚古墳・石室内の状況(年代不明:昭和30年代?)	
(13) 平塚古墳・石室に設置された支保工(平成9年度設置)	
(14) 角塚古墳、平塚古墳付近の航空写真(昭和30年撮影:平田昌久氏所蔵)	
(15) 平塚古墳・航空写真((14)の拡大写真)	
(16) 平塚古墳における祭礼風景(昭和10年前後?)	
(17) 平塚古墳における祭礼風景(平成20年10月19日撮影)	37
(18) 平塚古墳・石室内の「詰め上」の状況	
(19) 平塚古墳・石室内への雨水の侵入状況	
(20) 角塚古墳・航空写真((14)の拡大写真)	
(21) 角塚古墳・石室開口部	
(22) 角塚古墳・石室内の状況	



(1) 椀貸塚古墳・墳丘



(2) 椀貸塚古墳・石室開口部



(3) 椀貸塚古墳・石室に設置された支保工



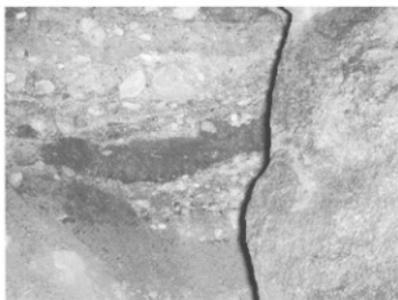
(4) 椀貸塚古墳・石室玄門部



(5) 椀貸塚古墳・石室奥壁部



(6) 梶貫塚古墳・玄室床面の状況



(7) 梶貫塚古墳・石材が抜け落ちた跡の状況



(8) 梶貫塚古墳・玄室左側壁の石材の割れの状況



(9) 梶貫塚古墳・石室内の「詰め土」の状況



(10) 平塚古墳・墳丘



(11) 平塚古墳・石室開口部



(12) 平塚古墳・石室内の状況



(13) 平塚古墳・石室に設置された支保工



(14) 角塚古墳、平塚古墳付近の航空写真



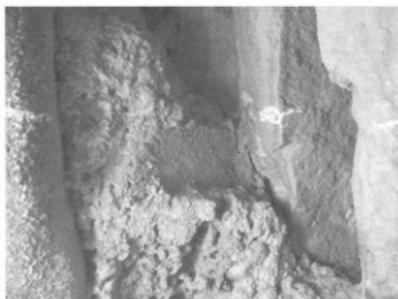
(15) 平塚古墳付近の航空写真 (S30)



(16) 平塚古墳における祭礼風景 (S10前後)



(17) 平塚古墳における祭礼の風景 (H20)



(18) 平塚古墳・石室内「詰め土」の状況



(19) 平塚古墳・石室内への雨水の浸入状況



(20) 角塚古墳・航空写真 (S30)



(21) 角塚古墳・石室開口部



(22) 角塚古墳・石室内の状況

ふりがな	かがわけんしていせきわんかじづか、かくづかおよびひらづかこふんぼぞん・かつようけんとういんかいほうこくしょ							
書名	香川県指定史跡腕袋塚、角塚及び平塚古墳保存・活用検討委員会報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	観音寺市教育 生涯学習課 文化振興係 主査 久保田昇三							
編集機関	観音寺市教育委員会							
所在地	〒768-8601 香川県観音寺市坂本町一丁目1番1号 TEL 0875-23-3943							
発行年月日	西暦2009年(平成21年)3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯 ° ' "	東 経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
わんかじづかこふん 腕袋塚古墳	香川県観音寺市 大野原町大野原 1913番地1	37205		34度 05分 16秒	133度 39分 48秒	20070219 ～ 20070831	7,585 (地番面積)	
ひらづかこふん 平塚古墳	香川県観音寺市 大野原町大野原 1533番地ほか	37205		34度 05分 00秒	133度 39分 34秒	20071217 ～ 20080424	4,088 (地番面積)	観音寺市埋蔵 文化財保存 整備事業
かくづかこふん 角塚古墳	香川県観音寺市 大野原町大野原 1681番地1ほか	37205		34度 05分 05秒 (WGS84系)	133度 39分 37秒 (WGS84系)	20080522 ～ 20080911	1,284 (地番面積)	
所収遺跡名	種 別	おもな時代	おもな遺構	おもな遺物		特 記 事 項		
腕袋塚古墳	古墳 (6世紀後半)	古墳 (6世紀後半)	古墳 1基			<ul style="list-style-type: none"> 円墳(直径約36m) 横穴式石室(複室構造) 石室全長12.10m(現存長) 石室奥壁幅3.45m 石室最大高3.86m(現況) 		
平塚古墳	古墳 (7世紀初)	古墳 (7世紀初)	古墳 1基			<ul style="list-style-type: none"> 円墳(直径約52m) 横穴式石室 石室全長13.06m(現存長) 石室奥壁幅2.68m 石室最大高2.58m(現況) 		
角塚古墳	古墳 (7世紀後半)	古墳 (7世紀後半)	古墳 1基			<ul style="list-style-type: none"> 方墳?(一辺43m) 横穴式石室 石室全長10.15m(現存長) 石室奥壁幅2.40m 石室最大高2.42m(現況) 		

香川県指定史跡腕貸塚、角塚及び平塚古墳
保存・活用検討委員会報告書

2009（平成21）年3月31日発行

編集・発行 観音寺市教育委員会
〒768-8601
香川県観音寺市坂本町一丁目1番1号
TEL (0875) 23-3943
FAX (0875) 23-3965
印刷 石川印刷興業株式会社